



Title	英國統治下のマライ人口
Author(s)	大爺, 榮一
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 11, 127-151
Issue Date	1945-02
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10723">https://hdl.handle.net/2115/10723</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_p127-151.pdf



# 英國統治下のマライ人口

大 翁 榮 一

皇澤の下、新たな歴史を創造しつつある南方の諸地域は、大東亞戰爭に至るまでタイ國を除いて悉く歐洲諸國の支配下にあつた。長きは數世紀に亘る歐洲の統治に依つて、此等の地域は文化的、經濟的、社會的に多くの影響を蒙り來つた。しかしながら其の刻印の深さは決して到る處一樣ではなく、各地域の間で著しく異なるものがある。歐洲支配國家の影響を謂はゞ表面的にのみ受け、其の住民の本來の生活の發展に大なる變化を蒙らなかつた地域もあれば、根本的にその影響を蒙つて變形された地域もあり、歐洲の勢力に依つて殆んど無から創造されたかの感を與へられる地域も又存在するのである。

今日我が軍政下に南方經營の重要據點となつてゐるマライの如きは蓋し此の最後のものに屬し、其の今日の性格を直接英國統治の結果として獲得したのである。此の「英國製」とも稱し得るマライ植民地の特質を、人口の面から觀察し、其の變遷と現状の概要を述べて見たい。

舊英領マライは南方諸地域中で最も恵まれた地理的位置を占めてゐる。アジア大陸から南方に突出する大半島の尖端部に位し、豐沃な東インド諸島中に深く突入して、印度洋から支那海に至る古來の東西交通路と、歐人の進出以來新たに重要性を得たスダ、モルツカ等の島々を歐洲と結ぶ通商路とを扼してゐる。又赤道下に位し周圍を海に圍まれて、周年の高溫と多量の降雨とは農業的な開發に有望な基礎を提供してゐる。

しかしながらマライのかゝる有利な條件が全面的に利用され發展せしめられるに至つたのは、十九世紀の英國の進出、特に一八七四年、海峽植民地に加へてマライ聯邦諸州が其の支配下に置かれての以後の事に他ならぬ。それ以前の、ポルトガルの、又オランダのマライに於ける征覇は、西歐諸國の、産業革命に先んずる中間商業的植民運動の時代に應じて、植民地物資の中繼地確保としての意味しか持たず、眠れる資源の新たな組織的開發の如きは全く等閑視されてゐた。マライ半島は未だ原住マライ人の國であつた。

今此のマライ人の歴史に就いて一顧すると、マライ半島に原始諸民族が接觸した歴史は古い、アジア大陸中央の高原地帯から南下する連嶺は有史以前より人種移動の大徑路であり、數多くの人種の波が此の山嶺からマライ半島を過ぎて東インド諸島へ移動し、其の餘波は遠く太平洋上の諸島に及んでゐる。今日スマトラ、ボルネオ、セレベス島の山間に居住する舊マライ系種族も、ジャワを筆頭に數千萬に達する新マライ系種族も悉くマライを通過しつゝ南下したのであつた。しかし此等の北方より移動し來つた諸民族は其の居住地として、比較的高燥な健康に適した氣候の地を好み、まづ火山地帯の山間盆地を求め、低濕地を避けるものであり、従つて高濕と絶えざる降雨を有し甚だしい低地密林に蔽はれたマライ半島は居住地として選ばれなかつた。その爲にマライに古くより今日まで居住し來つた種族は滅亡に瀕してゐるネグリト、サカイ、ジャクン等の、競争に敗れた原始的な劣等種族のみに限られて、今日の半島マライ人の中心である新マライ族の定着は極めて新しい時代の出來事に屬する。即對岸のスマトラに於いて發展し諸王國を形成した新マライ人がマライ半島に移住し來つたのは西曆十二三世紀から十五世紀に互つての事であつて、水田耕作民族たる彼等は直ちに先住のジャクン、サカイ等に對して優越した地位を獲得し半島一帯に定住するに至つた。東南アジア地帯に於ける水田耕作民族の居住の通則として、その居住地域の擴大は極めて徐々たるものであり、しかも小地域内での密集は屢々異常な大きさに達することが多いのである。マライ半島にあつても又此の例に洩れず、西海岸一部の水田造成の容易な地域には、自給自足經

濟を營みつゝ相當の密集を見たのであつたが、尙全土は殆んど未開拓のまゝ密林に蔽はれ、全體として人口極めて稀少なるまゝにポルトガル人オランダ人との接觸の時代を経て英人の渡來を迎へたのであつた。此の原住マライ人の經濟——低生活水準に甘んずる自給自足の水田農耕は、其後のマライ農業の異常な發展にも影響を受けることなく、今日尙マライ農業の最も古い面として留つてゐる。

英國はナポレオン戰爭後一八一〇—二〇年代に、從來よりマライに對する根據地として經營してゐたピナンに加へて、要衝シンガポールと舊蘭領マラツカとを獲得し、マライ半島から競争勢力を一掃した。しかし以後半世紀の間、マライの積極的開發に對して英國は何等の關心を示さなかつた。其の努力は中繼貿易港としての海峽植民地諸港の繁榮に向けられ、特にシンガポールは其の優秀な位置に依つて嘗てのマラツカ、ピナンを凌いで大過貿易港としての地位を固めたのであつた。

海峽植民地の發展と共にマライ半島には華僑が續々と流入し始めた。元來交趾支那やマライ半島と支那との交渉は歐人の渡來に遙かに先んずるものであり、規模は小さいが根強いものであつたので、海峽植民地に治安と繁榮とが齎らされるや、其の渡來は規則的な大きなものとなつた。彼等は港市に於いて商業と各種の勞働に従事すると共に一部は進んで内陸に入り、古くより知られ來つた錫鑛山をその資本と勞働とを以て獨占的に開發するに至つたのである。

マライ植民地發展の重要な轉回點は一八六七年の海峽植民地（シンガポール、ピナン、マラツカの三港と狭小な後背地を含む）のインド政廳からの獨立と、一八七四年のペラ、セラングール、ネグリセンピラン等諸州に對する保護權獲得であつた。此の後にマライ聯邦州を形成した諸州こそ其後のマライ發展の中核となつた地域であつたが、當時の状態は殆んど未開のまゝであつて、今日二百萬の人口を有するペラ、セラングール、ネグリセン

ピラン三州は領有後五年の一八七九年に十五萬を僅かに超ゆるのみであつた。全マライ半島は尙鬱蒼たる原生林に蔽はれ、其の中を蛇行する河川のみが内陸に通じ得る唯一の通路であつた。斯かる瘴癘未開の地——植民地のヨーロッパ人でシンガポールからシヤム南境に至る半島の州の名を全部擧げ得たものは恐らく一人も居ない(スウエツテナム)——を英國が敢て其の支配下に收めた動機は決して明瞭でない。表面に現れた限りでは、此等諸州に於ける内政上の紛糾の爲に海峽植民地の背後の治安が擾され、通商維持の爲に治安の恢復が必要であつた。又現實の經濟的利益としては、當時マライ最大の富源として華僑の手に依つて稼行されてゐた、錫鑛山地帯の獲得を目ざしたとも言ひ得る。しかしながら英國の此の地方の占領は、一八七〇年のスエズ運河開通を契機とし、英本國の經濟的成熟と相俟つて新たな未來が此の原生林の國の上に現れ來つた正しく其の時でもあつた。(舊蘭領東インドの開發が同じく一八七〇年を境として躍進を開始したことは注意を惹く。)

一八七四年以降、内陸諸州は急速に開發された。それは尙多く華僑の資本と勞働とに基くものであり、錫鑛山事業が中心であつた。英人の資本は最初は企業自體に投ぜられることなく、政廳の手に依り、治安の維持と鐵道、道路及通信設備の建設、水田の爲に灌漑工事の施行等に投ぜられるに止つた。歐人に依る農業開發はセイロン島から移住した農園經營者に依つて一八八〇年頃から着手されて、最初コーヒーの大規模な植付が行はれたが、相場の下落と病害との爲に全滅に瀕し、その危機に際してパラゴムの栽培が開始された。ゴム栽培の發展は其後マライ植民地の經濟的發展と殆んど同一視し得るまでに重要となつたのであるが、その當初にあつては需要の増加は尙緩慢なものであり、一九〇〇年前後に至つて初めてゴム景氣と稱すべきものが現れるに至つたのである。其後第一次大戰を契機としてゴムに對する需要は飛躍的に増大し、以後時に世界不況の影響を受けて一時的な需要減退を見たことはあつても、自動車工業の著しい發展がゴム消費量を年々より尨大なものとした。従つてマライに於けるゴム農園企業はその資本投下に於いて、その經營面積に於いて、その生産に於いて年々躍進を遂げ、遂

にマライ全經濟の巨大な中心となつたのである。

ゴム栽培が隆盛となる以前殆んど唯一の重要な産業であつた錫は十九世紀末から今世紀の始にかけて盛に發展したが、大戰後ゴムと反對にその需要増加が概して遅々たるものであつて、相對的には次第に重要性を失つた。歐人の資本は從來華僑資本の獨占する處であつた此の部門にも進出し、特に一九二六、七年の錫相場騰貴に際して錫事業に投下された大資本は、一九三一年以降の不況に際し強靱さを發揮して、華僑經營の衰退と相俟つて支配權をその手中に收めるに至つた。<sup>(5)</sup>かくて今日まで、マライ産業の支柱となつてゐたものは主として歐米人の資本の支配する二大原料生産業、ゴムと錫とであつたのである。<sup>(6)</sup>

マライ半島に英人が農園企業を起すに當つて、資本は、小規模には企業者の個人資本、後には大規模に英本國或は米國の金融市場から得ることが出來た。自然條件の好適な土地は尙至る處に未開のまま存在してゐる。然しながら原生林を大面積に互つて開墾し、植樹し、管理し、採液し、加工する多數の勞働力——英國人は資本を投下し企業を管理するのみであるから、當然英國人以外の——を如何にして調達するか、栽植企業の成立にとつて根本的な問題である。世界的に見て、此の勞働力調達は土着勞力の狀態如何に依つて二つの途を取つた。原住民の人口が多く、其の能力が相當優秀な場合には、原住民の勞働の利用が當然行はれる。しかし原住民の數が著しく少いか、或はその社會が經濟的文化的に尙發達低度を爲、規則的な勞働に耐へぬ場合には、より高級な勞働力を輸入せねばならぬ。しかも栽植農業の成立にとつて資本の問題を除いて最も根本的な二つの條件、廣大な未墾の沃地と安價で高級な勞働力とは、容易に兩立し難いものである。従つて、嘗て西半球の熱帶、西インド諸島とブラジルとに栽植企業が勃興した際にはアフリカからの黒人の大量の輸入が絶えず必要とされた。之に對して東南アジアの熱帶栽植農業地帯は勞働供給に關してより自足的であり、インドと支那とを含めて考へれば、東南ア

ジャの住民に依つて完全に勞働力を満してゐる。しかし其の内部では決して勞働が移動しないのではない。ジャワに於いて見る如き、完全に土地の原住民に依存し、勞働力の移動の殆んど行はれぬ栽植農業地域は寧ろ例外である。佛印に於いて、比島に於いて、一層著しくスマトラに於いて勞働力の移動が見られる。特にマライに於いてそれは最も著しく、原住民たるマライ人の勞働力が低能率の爲栽植企業に殆んど利用し得ず、海路多數の異人種の勞働力を輸入し、それに依つて始めて企業的發展が實現され得たのである。即英國のマライに於ける栽植農園企業は、先づ從來から此の地方に渡航してゐた華僑の勞力の利用に依つて開始され、大規模に發展するに至つては、直接インド人を契約に依つて招致し、或は新來の華僑を請負に依つて使用した。而してマライに於ける高賃銀<sup>(12)</sup>の吸引力は年々多くの華僑とインド人勞働者の波をマライに齎し、遂に今日原住民のマライ人を凌ぐ多數の人口が此等の人種に依つて占められるに至つたのである。

かくてマライの栽植農業に對する勞働力の供給は嘗ての北米、西インド、ブラジル等の栽植企業と類似するものがあるが、後者と根本的に相違するのは、アフリカからの奴隸輸出は常に一方的な移動であつたのに對し、マライに年々流入する華僑とインド人とは、同時に此の地に數年を過した勞働者の多數を絶えず母國に送還しつゝあり、時には歸國數の著しい超過を見ることすらあつて、栽植事業の必要とする勞働力とマライに存在する勞働力が合致する様な調節作用が絶えず行はれてゐる點にあるのである。<sup>(13)</sup>

マライ半島に流入した外國勞働力は、南支福建廣東兩省からの華僑移民と、インド人、特に南インドのタミール人の移民である。この中、より古い歴史を有するのは華僑であつて、英國の支配が未だ沿岸の諸港のみに止り内陸への進出の行はれなかつた時代から既に多くの移民がマライに流入し、その數は年々數萬人に上つた。一八八一年の人口調査當時海峽植民地に於いてマライ人に匹敵する十七萬の華僑が數へられるに至つてゐた。<sup>(14)</sup>同年の

華僑入國數は約九萬人であり、十年後の一八九一年の入國數が十四萬餘人に増加してゐることを考へると、既に一八八〇年代にマライへの華僑の入國は年々十萬を超えてゐたものと推定され、眞に驚くべき數といはねばならぬ。しかし年々歸國する者の數も相當多い上に、移民が大部分男子でマライでの自然増加が殆んど見られぬに對し、死亡率は甚だ高いので結局純入國者數の大半は不健康な熱帯植民地に於ける勞働力の甚しい消耗を補充する如き結果となつてゐた。<sup>(15)</sup> インド人の移民は、僅少の渡航費すら容易に支辨し得ぬ南インド農民の困窮の爲少數に止り、一八八〇年代の後半に年々二萬人程度の入國を見てゐたが、高死亡率の影響は此處にも同じかつた。されば一八九一年までの十年間に、海峽植民地の人口中、支那人の増加は五萬四千、インド人の増加は二萬三千に過ぎず、<sup>(19)</sup> 内陸地方への流入(特に華僑)を考慮に入れるべきではあるが、十年間に優に百萬に及ぶ華僑、十五萬―二十萬と推定されるインド人の入國數に比する時純増加數の著しく小さいことが注目されるのである。

一八九〇年代は、マライ聯邦州地方の開発が進み、勞働者の需要はいよいよ増加し、華僑の入國は常に十萬を超え、時に二十萬に達するに至つた。インド人の入國は前の十年に比してあまり増加せず年々二萬程度であつたが、兩者を合して毎年二十萬近い移民が此の熱帯植民地に流入した。然して此の期間に於いてマライの發展の重點が地域的には沿岸の諸港から内陸に移り、機能的には植民地貿易の中繼地たる從來からの地位に、栽培植民地及鑛業植民地としての新たな重要性が加はりつゝあつたことは、海峽植民地の人口が十年間に六萬を増加したのに對して聯邦諸州は實に二十六萬人、六十二%の増加を示し、<sup>(20)</sup> しかも勞働者として重要な華僑が殆んどマライ人に匹敵する約三十萬人に達してゐたことで窺はれる。<sup>(21)</sup> (次節以下附表一を参照)

マライ聯邦地方が英國の手に歸して以來確實に増加し來つた半島からの輸出貿易は一八九〇年代の後半から一八九〇年代の前半にかけて著しい發展を示し、既に年々二十萬に達する華僑勞働者の入國を以てしても尙尠大な

勞働需要に對して絶えず不足が感じられてゐた。特に此の頃からゴム農園の新設がいよ／＼多く、之に必要な勞働力を確保する爲に新たな措置が必要となつた。最初地理的に接近し人口稠密なジャワから新たに勞働者の輸入が行はれ、好成績を収めかゝつたが、之は從來ジャワに於いて安價な勞働力に依り、獨占的に東洋最大の栽植農業を發達させてゐたオランダの脅威を感ずる處となり、蘭印政府はジャワ人の蘭領外への勞働移民を禁止するに至つた。此の結果一九〇四、五年頃からゴム農園に於ける使用の俄に増大しつゝあつた南インド人(タミール人)勞働者の輸入を一層強化する事となり、其の渡航及歸航費全額を補助する基金として一九〇八年印度人移住基金 Indian Immigration Fund が農園經營者と政廳の共同出資によつて設けられた。

此の基金が設けられた當初一九〇八年及九年は輸出や、沈滞し移民も幾分減少してゐたが、一九一〇年に始まつたゴム景氣は忽ち勞働需要の擴大と移民の増加を招來し、一九一一年以來インド人の入國は年々十萬を超え、華僑の入國も又空前の多數に上つた。しかし一九一四年の第一次大戦勃發はこの趨勢に大打撃を與へ、一九一五年には華僑の入國は十萬を割るに至つたのである。大戦中一九一六年から一八年までの移民數は不明であるが、物價騰貴と相俟つて一九一七年から二〇年にかけて輸出貿易額は著しく増加してゐるにも拘らず、一九一九年及二〇年に於いてインド人入國數は戦前の水準、華僑は尙著しく戦前に劣つてゐた。<sup>22)</sup>

一九〇一年から一九二一年までの二十年間はゴム企業の勃興期に當り、輸出は順調に年々増大し、原生林を開いてゴムの栽培された面積は二百萬英町を超えた。従つて華僑とインド人勞働者の流入は十年代の後半に大戦の影響を受けたにも拘らず著しい數に達し、年々の入國數は出國數を常に凌駕してゐた。此等の老大な外國勞働力の流入と、それに依つて益々支配的となるゴム農園企業に對し、原住マライ人は依然水田小經營を繼續するのみで、栽植農園、特にゴム農園とは殆んど無關係であつた。<sup>23)</sup> マライ人口の自然増加率は華僑及インド人の死亡超

過と對照をなして年々十五%程度の出生超過を維持してゐたのであつたが、如何なる死亡超過をも蔽ひ盡す華僑とインド人の流入には、マライ人の増加は匹すべくもなかつた。土着水田經營の意義がたゞマライ人の食糧生産にのみ限られ、その生産の増加は到底全人口の増加に追隨し得ず、半島の食糧はシヤム、ビルマからの輸入に依存し、マライ人の水田耕作は置き忘れられた農業と化したのと平行して、總人口中に於いてマライ人の有する意義は質的に量的に重要性を減ずるのみであつた。(以下附表三を参照)

一九〇一年、一九一一年、一九二二年の人口調査に依つて各人種の比率の變化を見ると、海峽植民地では、一九〇一年に尙三七・六%を占めてゐたマライ人は一九一二年には三三・六%、一九二二年には二八・九%と低下を續けた。之に對して支那人は一九〇一年既に略々半數の四九・三%に達し、一九一二年五一・八%、一九二一年には五六・四%、マライ人の約二倍に上つてゐるのである。インド人は十乃至十二%であつた。而して此等三人種に對して全マライ産業を支配する歐洲人(大部分英人)は、その最も集中してゐる海峽植民地に於てすら、一九二二年僅に〇・九%に過ぎなかつたのである。

栽植企業勃興の中心たるマライ聯邦諸州では著しく異つた傾向が現れた。此の地方の人口増加は最初の十年に五二・八%、次の十年に二七・七%と最も目ざましく、従つて各人種何れも絶對數の大増加を見せたが、増加の最も著しかつたのはインド人であつた。之はゴム農園労働者としてのインド人の重要性を表はすものに他ならず、一九〇一年に聯邦州人口の八・六%を占めるのみであつたインド人は一九一一年一六・六%、一九二二年二三・〇%に達したのである。その結果絶對數では之を凌駕する華僑とマライ人も比率に於いては夫々華僑四四・二%から四一・八%(一九一一年)三七・三%(一九二二年)マライ人四六・〇%から四〇・六%(一九一一年)三八・六%(一九二二年)と若干の減退を餘儀なくされた。

非聯邦諸州(從來からの保護領たるジョホール州に加ふるに、一九〇九年北部のパリス、ケダー、ケランタ

ン、トレンガヌ四州をシヤム國の保護下から奪ふ。此等の總稱は元來マライ人の水田地帯であり、英領後日淺く栽植企業も未發達な爲、一九一一年二一年に於いてマライ人の壓倒的優位は動かなくなつたが、華僑とインド人は低率ながら増加を見せてゐた。

斯くて一九〇一年から一九二二年に至る二十年間に、海峽植民地に於ける支那人の進出とマライ人の後退、聯邦州に於けるインド人の増大等、大規模な人種構成の變化が進行した。

二十世紀の最初の二十年はマライ産業の勃興期であり、絶えざる開發と伸展と、絶えざる移民の流入の時期であつた。然るに此の順調な二十年に對して次の二十年は、少數の巨大な産業に依つて一面的に支配され、營利的には極度に合理化されてゐるが、反面いよゝゝ畸形的な産業構成となつたマライの經濟が、空前の繁榮を示し、續いて恐慌に見舞はれて激しく動搖し、之に伴つて半島に流れ入る移民の波も時に高く時に低く、或は逆流する様相を示すに至つた時代であつた。

大戰直後の好景氣は一九二〇年を以て終りを告げ、同年末ロンドン市場のゴム及錫の相場は暴落し、翌二十一年の輸出額は二十年の半分以下に減退するに至つた。此の不況が勞働者入國に及ぼした影響は著しく、直接契約のインド人勞働者は二十一年に前年の半數以下に減じ、自由入國の多數を占める華僑にあつては二十一年の入國數は尙好況の影響強く、二十二年に至つて約六萬人を減じた。以後一九二四年まで生産制限等の措置に拘らず市況は沈滞し勞働者入國の不振が続いた。

然るに一九二五年ゴム市場にはブームが襲來し、その結果植民地の輸出總額は一九二四年の七億二千萬海峽ドルから一九二五年には約十三億海峽ドルに躍進した。之に伴ひ一九二五年既にインド人と華僑の入國は上昇し、一九二六、二七年に至るや華僑の入國は各々四十萬を超え、インド人又約十二萬に達し、一九二七年には兩者合

計入國數五十五萬を超え、未曾有の記録を作つた。(以下附表二をも参照)

しかし此の好況も二十七年を境として下降に轉じ、三十年には逆に不況に突入し、三十一年より三十三年にかけてはかの世界恐慌の裡、輸出は著しく萎縮するに至つた。此の爲、二十五年―二十七年の好況の結果極度に膨脹を見てゐた栽植事業と錫採掘とは大縮少を餘儀なくされ、インド人労働者は二十八年早くも出國超過に轉じ、三十年から三十三年まで四年間に十七萬を超ゆる出國超過を見た。インド人労働者に比して景氣變動の影響を受けることのやゝ遅い華僑移民は、一九三〇年まで曩の好況に續いて尙多數渡來してゐたが、不況に向つて歸國者は増加し、遂に一九三一年を轉機として大出國超過となり三年間に歸國者數は約七十萬、歸國超過數は二十四萬に達した。此の間歸國者の絶對數は三十年三十一年に最も多く、入國者數の減退と相俟つて歸國超過數は三十一年三十二年に最も多く、入國者數が最低となつたのは三十二年から翌三十三年に至つてであることは、景氣の波動が移民の波動となつて現れる時、當然時間的に遅れを生ずるのを示してゐる。

世界恐慌に依る沈滞は一九三四年から次第に上向に轉じ、他方不況の數年間に大量に國外排出が行はれた結果は勞働力不足となり、一九三四年まづインド人、一九三五年以降華僑の入國は再び増加し、以後概して増大しつゝ一九三八年に至つた。以後の數年については不明であるが恐らく相當の入國を見てゐたものと考へられる。

一九二〇年以後の移民の出入が特に景氣變動と平行關係にあることは曩に述べたが、全輸出額の過半がゴムと錫とに占められる原料生産地であるマライでは、對外貿易に於ける輸出金額の増減をそのまま、景氣の指標と看做して兩者の關係を觀察することが出来る。景氣が上昇すると先づ出國者の率が減じ、之と共にインド人労働者の入國が増加する。華僑の入國は一年ほど後れて増加し、好況の絶頂よりもやゝ遅れて入國數が最大となる。景氣がやゝ下降する時期には、入國者はまだ減少しないが歸國者は既に増加を開始して、入國超過數は減じ、不況の

進行時には入國者の減退と前期の入國者の多數の歸國に依つて出國超過が最大となる。入國數の最低は不況の最低點を過ぎて後始めて到達されるが、此の時には既に過剩勞力の大部分を排出して歸國數は減じ、出國超過は小となる。やがて再び入國の増加によつて入國超過が開始されることとなる。

此の過程は栽植企業労働者たる南インド人に於いて明瞭である。然るに同じインド人にあつても金融業者、軍人警察官等の多い少數の北インド人に對しては殆んど看取されぬ。北インド人は年々略々同一の入國數を示し、三十一年三十二年には歸國者は増加したが尙歸國超過には至らなかつた。華僑は南インド人に比して自由移民的な性質が遙に強く、農業労働者以外に多數の商業階級や鑛工業労働者をも含むのであるが、しかも南インド人とほゞ同様に大きな移民の動きを見せてゐる。此の事からも、マライの全經濟機構に於いて、典型的な世界市場商品たるゴムの單一耕作が如何に中心的な意義を持つてゐるか推察される。誠にマライ半島への東亞に比類を見ない大規模な人口の流入と其の波動はすべてゴムの生産をめぐる行はれ來つたのであり、質的量的に貧弱な原住人口を有する地域が栽植植地として開發される場合の人口流動の傾向を明瞭に表明してゐると言はねばならない。

一九四一年六月末のマライ人口統計は英國の統治の下に發達した人口の最も新しい姿を示してゐるが、全人口五百五十萬人で三十年前一九一一年の二百六十七萬人の二倍に達してゐた。<sup>(2)</sup> 其の人種別は、支那人が二百三十八萬人、四三・二%と遂に第一位を占め、マライ人は二百二十八萬人、四一・二%で第二位になり、インド人七十四萬人、一三・五%、歐洲人三萬一千人、〇・六%、歐亞混血人一萬九千人、〇・三%であつた。支那人、マライ人は正に匹敵する多數であり、インド人も有力な分子であり、歐洲人は極めて少數を以て支配的地位を占めてゐた。此等の人種群はマライの植民地社會に於いて夫々に如何なる獨自の意義を有し、相互に如何なる關係に立つてゐ

るか、他に見られぬ人種的錯綜と高度に分化した諸職業及職業階層は、一見極めて複雑な状態を示してゐるのである。

併しながらマライの社會は、人種的に複雑を極めて居るにも拘らず、之を經濟構成の面から見る時寧ろ少數の相互に明白に分離し得る諸要素から成立つてゐる。即ちマライ經濟なるものは、大栽植企業に依つて世界市場を目標に栽培されるゴム、<sup>(28)</sup>同じくココ椰子と油椰子、錫鑛山事業、遠くスマトラ、ジャワ、タイ、ボルネオ等をも勢力圏とする沿岸諸港の商業、自給自足的なマライ人の水田耕作とココ椰子栽培、此等を主要な構成要素とし、小賣及仲買的商業、消費工業、加工工業等が副次的に附屬してゐるのである。然して歐洲人、華僑、インド人、マライ人等は此等の中のある特殊産業、又は一産業中の特殊な労働部門を夫々に擔當して屢々殆んど排他的な集團を形成してゐる。そして或る一機能のみを擔當してゐる集團が封鎖的であればあるほどそれは必然的に他の機能を擔當する集團と相互依存の關係に立つわけである。例へばゴム農園企業に於ける英人資本家とインド人労働者の間の關係では、英國人がインド人を缺き得ぬのと全く同様にインド人にとつて英國人は缺き得ぬ存在となつてゐたと言ひ得るし、更に廣くマライの全經濟社會が夫々特殊な機能を有する各人種の密接な相互依存を基礎として成立して居たと看做される。然して斯く全經濟社會を一構成體として成立させてゐた原動力が、ゴムと錫の純粹に營利的な對世界市場生産であつたのである。

各人種の社會階層的地位を見ると、最も少數の英人は最上部を占め、多數の華僑は、一部は上層に達し、最下層の労働者も多いが、中間層と労働階級の上層に於いて最もその意義が大きい。インド人は殆んど全部が労働階級、しかも下層に屬するが、少數の特殊の者が中間層に位してゐる。マライ人は英人、華僑、インド人が相互に密接な依存關係に立つのに對し、より獨立的な立場にあるが、大多數は下層の状態にあることいふまでもない。

各人種はかくして、かなり明瞭な上下の關係、英人、華僑、マライ人、インド人の層を示してゐるが、之を更に個々の産業に就いて見れば又夫々獨自の状態が存する。(以下引用する職業統計の數字は一九三一年當時のものである。尙附表四をも参照) 先づシンガポール、ピナンの大海港の繁榮を荷ふ商業は、マライ全體としては職業人口の一〇・七%を占めるのであるが、内約半數の十萬餘人が海峽植民地に集り、その職業人口の二三・五%に達してゐる。この商業人口は大銀行から行商までを含むのであつて、全商業人口中七二・六%は華僑に占められ、一・二%が僅かに歐洲人である。従つて華僑の商業上の數的に優勢な地位が知られる。しかし歐洲人商業人口はその約七十五%迄が商店主、支配人、高級店員等の上層に位し、華僑商業人口の三十三%に達する呼賣、行商の類が全く見られぬことは歐洲人と華僑とが階層を異にすることを明にする。華僑には小商店が多いので「商店主支配人」の總數中華僑は七十二%、歐洲人一・五%であるが、「銀行員」にあつては歐洲人が四十一%に達し、華僑が四十九%であることから、大商事機關と小商人との人種的對照が看取される。金貸兩替業にインド人(北インド人)が獨占的であること(八二・二%)<sup>(29)</sup>、華僑は一七・三%、仲介代理業にマライ人の多いこと<sup>(30)</sup>等も人種と關聯のある特徴である。

鑛業と工業は合して全職業人口の一・二・三%を占め鑛業労働者九萬餘、工業労働者十五萬餘で、前者は殆んどマライ聯邦州に集中し、後者は海峽植民地が中心である。此の部門では體力と知力の優秀な華僑が優勢で工業労働者の七十%を占め、特に鑛山労働者は獨占的に九十%以上に達してゐる。錫鑛業經營管理者數では華僑は歐洲人の四倍に上るが、最近には鑛業に對する支配權は後者に握られるに至つてゐた。

全産業人口の六〇・八%を占め最も重要性を有する農業に於いては、歐洲人、華僑、インド人、マライ人が夫々獨自の機能を擔當して複雑な興味ある様相を呈してゐる。歐洲人は固より極めて少數ながら、その殆んど全部(九十四%)がゴム農園企業の所有者又は管理者である。インド人は最も特異性を有し、農業従事者の八十五%

餘がゴム農園に勞働し定額賃銀を受けて下級勞働に従事してゐる。五十萬餘のゴム園勞働者中三八・四％はインド人である。華僑のゴム園勞働者數はインド人に殆んど匹敵し、請負制度に依つてより熟練を要する勞働を擔當してゐる。しかもインド人農業従事者がゴム園に集中するのに對し、華僑の農業者中四十一％は他の部門（水田を除く）に従事し、特に果實蔬菜の栽培を獨占してゐる。又華僑經營のゴム園は概して小規模ではあるが其の數は多く、ゴム園所有管理者の四十四％は華僑の占める處である。マライ人にも小園所有者が多く、三十六％に當る。華僑及マライ人に比してインド人のゴム園所有又は管理者は皆無に近い。

華僑とインド人とが全く米作に従事しないことは奇異の感を與へるほどで、合計しても米作従事者の二・三％に過ぎぬ。三十八萬人のマライの水田耕作者は實に九十五％までマライ人に占められて、此處にも又人種に依る職業分化が現はれる。此の水田經營こそは進歩しない小經營であつて、ゴム、油椰子等の農園と全く異つた經營目標を有するものであり、マライの全經濟部門中で世界市場の景氣變動と何の係りもなかつた唯一の部分であつた。最近に於ける米の自給率は約四十％に過ぎず、従つて生産された米の大部分は都市の市場に出でることなくマライ人の間で消費されてしまつてゐると考へられる。マライ人が半島の各人種中で獨自の地位を占めるのは之に基いてゐる。開發、輸出の増大、ゴム市場の好況等に對して歐洲人、インド人、支那人が直接間接に抱かざるを得ない關心はマライ人にとつては最も無縁なものとなるのである。

農業中には其他重要性の劣る諸部門がある。新しい栽植作物である油椰子は輸出生産物で歐洲人と華僑とが大規模に經營し、勞働者は悉くインド人である。ゴムと米に次いで重要なココ椰子は元來原住民の食料でマライ人に依つて小規模に栽培されてゐたが、最近ではコブラ採取の目的で栽植的に大規模に經營されマライ人とインド人が働いてゐる。林業勞働は七十七％までは華僑である。

以上に各人種の擔當してゐた特殊の機能を略説した。各人種は夫々獨自の諸集團を形成し、しかも其等全部が

結合して始めてマライ全經濟機構の圓滑な運轉が可能なのであつた。インド人なくしてはゴム、油椰子の栽植農園は成立しない。全經濟面に喰ひこみ、特に商業鑛工業に優位を占める華僑は眞にマライ人口の中核を爲してゐる。少數の歐洲人の果してゐた機能が失はれ、ば全經濟は痲痺状態に陥つたであらう。獨りマライ人のみが、その大なる人口にも拘らず、水田耕作を以て全人口を扶養すべき機能を果し得なかつたが故に、次第に附隨的なものと化して行つたのである。

マライ半島は英國の治下に一つの特異な植民地となつた。其處を故郷とせぬ人種、華僑とインド人とが遂に全人口の過半を滿すこととなり、原住マライ人は退歩を續けるのみである。人種の錯雜と外來人種の優勢との爲、國土と結びついた統一的民族、祖國の如き觀念の發達は全く期待し得ない。しかも經濟的には此等諸人種は一つの統一の取れた組織體として活動してゐたのである。其の經濟は三つの面、自給的水田經營、中繼貿易、輸出産業としての錫鑛業と栽植企業から成り、最も新しく發展した最後の面が結局全經濟の主軸となつた。此の栽植企業に對して莫大な資本は投下され、原生林は拓かれ、年に幾十万の勞力が海を越えて流入し、其の生産物は世界市場を左右するに至つた。斯くして歐洲的開發は遂行され、英國の誇る英領マライ植民地が形成されたのであつた。

今我が軍政下にマライが新に如何に發足しようとしてゐるか、其の實情を十分詳にし得ないのは遺憾である。しかし英國統治に依つて全く特異に形成され來つてゐたマライに、一つのより正しい經濟發展の方向を與へ、之を具體的に推進するのは蓋し容易な事業ではあるまい。單一の世界市場商品を目標とする經濟機構の下に結合し組織されてゐた諸人種は、恐らくその唯一の統一力を失つては雜然たる不統一の集合と化するであらう。北方四州のタイ國への復歸はマライ人の水田地帯を殆んど失ふこととなる、食糧の自給率をより正常なものとなし、ゴ

ム農園事業が或る程度縮少された場合に各人種に能力に應じた新しい適當な労働を與へることのみでも、實に容易ならぬ問題である。まして雜然たる人種の集合に、統一された積極的な意志を抱かしめる事の困難は、たゞ異常な實踐的努力に依つてのみ克服されるものであり、新たに指導民族たる地位を荷つた我國民に課せられたる任務の重大なるを思はざるを得ないのである。(終)

以下の註と附表に引用し又は計算の基礎となした數字は次の諸書を利用せり、括弧内の數字を以て夫々書名に代用す。

- ① Statesmans Year Book 1885-1940
- ② 東亞研究所刊 南方統計要覽
- ③ 大南洋年鑑 第二版
- ④ Statistical Abstract of the British Empire
- ⑤ 臺灣總督府刊 馬來事情
- ⑥ 南洋叢書 英領マレー篇
- ⑦ 南洋華僑叢書 英領馬來、ビルマ及濠洲に於ける華僑
- ⑧ Rupert Emerson: Malaysia
- ⑨ Heinz George: Kauschuk
- ⑩ 尙⑨等よりの引用は特に原書を擧げることゝ爲さず。
- (1) スウェツテナムの記述に依る。
- (2)(3) 海峽植民地からのゴム輸出額(通過貿易を含む) (一)

一八九七年	八、一三九、二八三	海峽、ドル
一八九九年	一六、一四九、七六二	〃
一九〇一年	一九、二八一、〇〇〇	〃
一九一三年	二六、五〇七、九七〇	〃

(一) 海峽ドルは二志四片、尙磅記載はすべてドルに換算して示す)

一九一四年	四二、七七六、四八〇
一九一五年	八四、六四三、八二〇
一九一六年	一三九、二四〇、一七〇
一九一六年	二一六、〇七九、四九〇

(4) (5) 錫探鑛高と歐洲人並華僑の探鑛歩合 (内) 華僑探鑛 歐洲人探鑛

一九一五年	四六、七六六トン	七二%	二八%
一九二〇年	三四、九三四	六四%	三六%
一九二五年	四五、九二五	五六%	四四%
一九三〇年	六二、〇六二	三七%	六三%
一九三五年	四〇、七五六	三四%	六六%

(6) 海峽植民地の輸出中錫とゴムの占める割合(通過貿易を含む、純輸出に非ず)(一)

錫 %	18.1
ゴム %	3.9
1895年	不
1898年	明
1901年	7.2
1904年	3.9
1907年	5.4
1910年	11.3
1913年	6.8
1916年	28.3
1919年	明
1922年	26.9
1925年	45.8
1928年	38.7
1931年	29.5
1934年	51.5
1937年	54.1

(7) 一九三六年現在のゴム會社に對する投資額は五千五百二十七萬英ポンドであつて企業投資總額の約三分の二を占める。

(H・G・キヤリス)

(8) (9) ゴム栽培面積と純輸出高 (内)

一九〇五年	四六千エーカー	一〇四ロングトン
一九一〇年	五四一	六、三〇〇
一九一五年	一、二九〇	七〇、六〇〇

(11)(10) 交趾支那のゴムと水田の大經營に對して、東京安南地方の安南人が流入してゐる。ルソン島中部の砂糖農園に北部のイロカノ人が移動（多く出稼的）してゐる、又ミンダナオ島のダバオ地方にはセブ地方のピサヤ人が移住してゐる。

一九二〇年	二、一八一〃	一七四、三〇〇〃
一九二五年	二、四七七〃	二一〇、〇〇〇〃
一九三〇年	三、〇一〇〃	四四三、〇〇〇〃
一九三五年	三、一九五〃	四一七、〇〇〇〃

(12) 一九三八年當時ジョホール州ゴム農園に於ける華僑切工の日給は七五—八〇セント（出來高制、食住給與）一九三七年シンガポールに於けるゴム再製工場工員の日給は六五—八〇セント（出來高制、住宅給與）であつた。一九三八年のシンガポール市場タイ米（卸賣？）相場を利用して換算すると七五セントは米七・三升に當る（米一トン七石とす）。同様の計算によると一九三七年拂印サイゴンでは男子一日の平均賃銀米五・四升、比島マニラでは一九三九年工業労働者一日四・七升に當る。尙佛印と比島に於ける最も人口稠密のハノイとセブでは夫々二・五升及三・一升である。（資料は(1)の他に大東亞統計叢書、南洋叢書佛印篇等）

(13) 栽植企業労働力の中心である南インド人の如きは近年歸國率著しく高く、労働力の移住と見るよりも純然たる出稼ぎと見る方が適當になつてゐる。一九二六年から三八年まで十三年間の歸國率は九六・八%に上る。華僑は同一期間に於いて八〇・五%の歸國率を示すが、入國超過数は尙七十五萬人に達する。（附表二参照）(1) (2) (3)

華僑一七四、三二七人、マライ人一七四、三九二人、インド人三〇、九八五人

一八八一—一九〇〇年間に廈門、仙頭、瓊州からシンガポールへ出入した華僑の歸國率は二八・二% (4)

(14) 一八八一年から九八年までに海峽植民地へ入國した華僑の男女比は男一〇〇に對し女四・四 (5)

(15) 過去の死亡率がどの程度に高かつたかは不明であるが、一九二七年に於いて海峽植民地千分の三三・五、聯邦州千分の三三・一の死亡率を示したことから推測すると著しい高さであつたらう。尙近年死亡率は著しい減少を見せてゐる。（總人口中で出稼ぎ労働者の割合の減じたことがその一因である。） (6)

(18) 近年定住人口の増加に伴つて華僑とインド人の男女比は次第に改善され、出生率が向上し、特に一九三〇年代の恐慌の際に労働者の大量歸國が行はれて後は出生は死亡を超過する様になつた。華僑人口の男女比は一九二一年に男一〇〇に對

し女三八・四、一九三一年に五一・三、インド人は夫々四〇・六と四八・二である。出生率は人種別は不明であるが、全體としても、男女比が良好となりつゝある爲年々増加してゐる。一例を挙げれば海峽植民地に於いて一九二六年に千分の三二・九、一九二九年に三七・二、一九三二年に三八・二、一九三五年に四一・七。

死亡率の減少と出生率の増加と相俟つて自然増加率の改善は著しい。一九三五年の自然増加率は海峽植民地千分の一・六、七聯邦州一五・九、非聯邦州一四・四、之に對し一九二六年には海峽植民地千分の一・一、聯邦州一・八、今日ではマライは昔ての如き人口の消耗地ではなくなつてゐる。(四六)

(19) 一八九一年、華僑二二七、九八九人、インド人五三・九二七人(註(14)を参照)(一)

(20) 海峽植民地は五一二、三四二人から五七二、二四九人に増加、聯邦州は四一八、五二七人から六七八、五九五人に増加。(一)

(21) マライ人三二二、四八六六、華僑二九九、七三九人。(一)

(22) 附表一参照。

(23) マライ人のゴム農園労働者數もまた決して無視出来ない(附表四参照)のではあるけれど、マライの栽植企業發達の過程に於いては華僑及インド人の有した意義と比すべくもないのである。

(24) 一九一一年から四一年まで三十年間の年平均實増加率千分の一五・五、自然増加率も之に近いものであらう。(四四)

(25) 食糧自給に關して全然考慮が拂はれなかつたとは言へない。灌溉工事なども相當に行はれた。しかし歐洲人と華僑の企業資本が水田事業に投下されることは全くなかつた。企業的な水田の大經營が發生した佛印の交趾支那等と比較すると著しい相違がある。

註(6)を参照。

(26) 一八九一年以來の全マライの人口増加。(一)(四)(六)

(27) 一八九一年 九三〇、八六九人

一九〇一年 非聯邦州を含まず 一、二五〇、八四四人

一九一一年 二、六七二、七五四人

一九二一年 三、三五八、〇五四人

一九三一年 四、三八五、三四六八

一九四一年 五、五〇八、七三〇人

(28) 面積百英町以上の經營がエステートとして取扱はれ、之以下のものは小園と稱せられてゐるが、その面積も生産高もエステートの半を超えるもので、その意義は極めて大である。しかし此等の所謂小經營も雇傭勞力を使用し、純粹に營利を追求する點に於いて大栽植經營と本質的に異なるものではない。

(29) 全産業人口中でインド人の比率は一四・九% (b)

(30) 二四・四%。一番多いのはやはり華僑である。(b)

(31) 百英町以上の經營について見ると華僑所有のエステートの平均面積は歐洲人所有の五分の一程度である。(一九三七年

に一五三〇英町と三〇八英町) (b)

(32) マライ人の農業従事者總數の六一・八%に當る。之に對してゴム園に勞働する者は二〇・九%である。(b)

附表一 最近五十年間の輸出貿易額と移民入國數

年度	輸出額	華僑	インド人	年度	輸出額	華僑	インド人
	千ドル	人	人		千ドル	人	人
1891	125,805	144,066	30,183	1916	492,308	不明	不明
92	134,637	不明	18,421	17	619,765	不明	不明
93	144,757	不明	18,421	18	616,475	不明	不明
94	173,900	153,583	14,901	19	874,766	70,912	101,433
95	172,975	212,194	16,005	1920	1,024,046	126,077	95,220
96	173,720	199,282	20,150	21	497,358	191,043	45,673
97	191,351	129,896	20,599	22	543,093	132,886	58,674
98	212,308	133,558	18,814	23	713,198	132,886	49,502
99	239,054	149,697	18,981	24	725,085	181,430	43,147
1900	262,617	200,943	35,351	25	1,289,885	214,692	70,198
01	266,553	178,778	25,357	26	1,273,474	424,611	117,055
02	301,473	207,156	18,675	27	1,068,694	435,708	119,698
03	324,847	220,321	22,053	28	852,026	388,305	72,861
04	312,507	204,796	30,752	29	931,129	395,479	89,647
05	282,960	173,171	39,540	1930	671,214	343,502	69,657
06	311,055	176,587	52,041	31	429,828	191,690	51,576
07	305,297	227,342	62,130	32	366,301	138,328	44,863
08	273,814	153,452	54,522	33	401,791	124,460	45,163
09	281,177	151,752	49,817	34	566,645	223,892	124,579
1910	324,188	216,321	83,723	35	581,963	278,168	100,935
11	341,888	269,854	108,471	36	627,762	282,299	73,681
12	375,128	251,644	106,928	37	905,106	402,563	158,042
13	388,928	240,979	118,583	38	581,554	228,669	76,300
14	384,123	147,150	不明	39	750,190	不明	不明
15	403,921	95,735	75,323	1940	1,128,169	不明	不明

英國統治下のマライ人口

- 註 (1) 資料、ステイツマン年鑑、南洋叢書英領マレー篇其他。  
 (2) 通貨は海峽ドルにして、1905年以後2志4片=1ドルの交換比率なり。  
 (3) 輸出額は海峽植民地の貿易統計に依る、従つてマライよりの純輸出の他に通過貿易を含む。  
 (4) 1915年より25年までのインド人入國數は南インド人のみなり、北インド人入國は年々2萬人程度。  
 (5) 1892及93年のインド人入國、1922及23年の華僑入國の數字はステイツマン年鑑の誤りかと想像されるもそのまま掲ぐ。

附表二 1926年以降華僑及インド人の入國出國數(人)

	華僑	差引出入數	北インド人	南インド人	インド人 合計	差引出入數
1926	{ 入 424,611 出 253,068 }	入 171,543	{ 入 20,142 出 7,129 }	{ 入 96,913 出 52,838 }	{ 入 117,055 出 59,967 }	入 57,088
1927	{ 入 435,708 出 303,497 }	入 132,211	{ 入 21,131 出 11,179 }	{ 入 98,567 出 74,170 }	{ 入 119,698 出 85,349 }	入 34,349
1928	{ 入 388,305 出 299,511 }	入 88,794	{ 入 20,030 出 11,320 }	{ 入 52,831 出 67,809 }	{ 入 72,861 出 79,129 }	出 6,268
1929	{ 入 395,479 出 285,678 }	入 109,801	{ 入 21,654 出 11,724 }	{ 入 67,993 出 66,369 }	{ 入 89,647 出 78,093 }	入 11,554
1930	{ 入 343,502 出 314,916 }	入 28,586	{ 入 20,452 出 14,864 }	{ 入 49,205 出 100,452 }	{ 入 69,657 出 115,316 }	出 45,659
1931	{ 入 191,690 出 304,655 }	出 112,965	{ 入 18,435 出 17,179 }	{ 入 33,141 出 104,952 }	{ 入 51,576 出 122,131 }	出 70,555
1932	{ 入 138,328 出 235,846 }	出 97,518	{ 入 17,918 出 16,238 }	{ 入 26,945 出 88,265 }	{ 入 44,863 出 104,503 }	出 59,640
1933	{ 入 124,460 出 155,638 }	出 31,178	{ 入 17,235 出 13,478 }	{ 入 27,928 出 39,103 }	{ 入 45,163 出 52,581 }	出 7,418
1934	{ 入 223,892 出 162,253 }	入 61,639	{ 入 22,287 出 15,155 }	{ 入 102,292 出 35,626 }	{ 入 124,579 出 50,781 }	入 73,798
1935	{ 入 278,168 出 187,182 }	入 90,986	{ 入 20,846 出 16,998 }	{ 入 80,089 出 47,044 }	{ 入 100,935 出 64,042 }	入 36,893
1936	{ 入 282,299 出 206,498 }	入 75,801	{ 入 18,199 出 16,138 }	{ 入 55,482 出 47,573 }	{ 入 73,681 出 63,711 }	入 9,970
1937	{ 入 402,563 出 222,061 }	入 180,502	{ 入 22,689 出 17,409 }	{ 入 135,353 出 50,988 }	{ 入 158,042 出 68,397 }	入 89,645
1938	{ 入 228,669 出 175,489 }	入 53,180	{ 入 20,436 出 17,295 }	{ 入 55,864 出 79,115 }	{ 入 76,300 出 96,410 }	出 20,110
13年間	{ 入 3,857,674 出 3,106,892 }	入 751,382	{ 入 261,454 出 186,106 }	{ 入 882,603 出 854,304 }	{ 入 1,144,057 出 1,040,410 }	入 103,647

附表三 人口中各人種の割合の變化 (一)(三)(四)(八)

	年度	マライ人	支那人	インド人	歐洲人	歐亞人
海峽植民地	1881	45.9	45.9	8.2	%	%
	1891	41.6	44.5	10.5	不明	不明
	1901	37.6	49.3	10.0	不明	不明
	1911	33.6	51.8	11.5	1.0	1.1
	1921	28.9	56.4	11.9	0.9	1.0
	1931	25.6	59.6	11.9	0.9	1.0
	1941	21.7	64.8	10.4	1.3	0.9
聯邦州	1901	46.0	44.2	8.6	不明	不明
	1911	40.6	41.8	16.6	0.3	0.2
	1921	38.6	37.3	23.0	0.4	0.3
	1931	34.7	41.5	22.2	0.4	0.2
	1941	32.6	44.7	21.1	0.5	0.2
非聯邦州	1911	82.9	12.1	1.4	0.0	0.0
	1921	77.0	15.8	5.4	0.0	0.0
	1931	69.2	21.7	7.3	不明	不明
	1941	66.5	24.9	6.9	0.1	0.0
全マライ	1911	53.8	34.3	10.0	0.4	0.4
	1921	49.2	35.0	14.0	0.4	0.4
	1931	44.7	39.0	14.2	不明	不明
	1941	41.3	43.2	13.5	0.6	0.3

英國統治下のマライ人口

一五〇

註 1881年海峽植民地の比率は歐洲人等の數が不明なる爲マライ、支那、インド人の比率の合計を100となる様にして計算したものなれば此等は實際よりも幾分大となりたり。

附表四 マライ聯邦に於ける各人種の經濟的地位 (1931年)

		歐洲人	支那人	インド人	マライ人	計
漁業		—	7,291	56	6,012	13,369
米作		—	1,038	1,892	89,122	92,052
ゴム農園	所有管理	1,121	1,514	58	2,723	5,416
	勞働	—	100,789	131,099	48,443	280,331
ココ椰子農園	所有管理	11	23	9	1,413	1,456
	勞働	—	1,256	8,010	10,194	19,510
其他の農業		23	16,115	9,833	25,549	51,520
錫鑛業	所有管理	48	214	—	8	270
	勞働	282	70,704	4,622	1,008	76,616
商業	所有經營	246	16,894	4,428	1,049	22,617
	使用人	144	16,576	3,790	646	21,156
計		1,875	232,414	163,797	186,227	

註 Rupert Emerson 著 MALAYSIA 183頁より引用

特に大なる數に下線を施す。